

句集

山景

月の雫

橘 澄男

橘 沙希

金婚記念・二人句集

山景を

深み研す

ほととぎす

澄男

白萩は

月の雫を

もらひ付り

沙希

句集

山景
月の雫

橘 橘
沙 澄
希 男



句集

山景

橘
澄男



山景

平成十五年
平成十四年
平成十三年
平成十二年
平成十一年
平成十年
平成九年
平成八年

113 97 79 57 41 29 13 1

橘澄男

平成
八年



二〇
句

晩年の豊かな手相年迎ふ

初山路羽化登仙を夢みつつ

学寮の寒声星に研せる

お水取テレビで火の粉浴びにけり

昭和史の雪の思ひ出数多あり

ひそやかな鳥語芽吹きを誘へり

老
懶
に
馴
れ
ゆ
く
思
ひ
臙
の
夜

腕
時
計
嫌
ひ
の
手
首
日
焼
け
せ
り

蓮 浮 葉 風 に 乗 り くる 鳩 の 笛

湯 あ が り の 裸 子 馳 け て 月 涼 し

さりげなきことが信条暑に対す

光陰をかるがるしくも大昼寝

屈
葬
の
形なり
に
目
瞑
る
夕
端
居

朱
印
捺
し
残
暑
を
か
こ
つ
声
に
和
す

雲の峰老ゆるに力要ることよ

惜命の振子の加速秋の暮

さなきだに独りの山路露けかり

せつかくの道をしへなりあとに蹤く

焚火の香たたせ谷中に住み古りぬ

クリスマス縁なき者は山歩く

平成
九年



二八
句

三
世
代
賑
や
か
に
あ
り
去
年
今
年

雑
煮
餅
心
し
て
ゆ
つ
く
り
と
食
ぶ

踏み入りてひとひら掌にす霜の華

健やかなことも不安に冬籠

寒夕焼助走を長く鶺鴒の翔てり

阿夫利嶺の天狗の寝まる雪衾

父祖よりの榊を大事に年の豆

風邪寄せず湯あがりに浴ぶ寒の水

隅田川水に溶けゆく雛流す

寺町に供華焚く煙夕朧

遠
き
代
は
模
糊
と
神
代
桜
か
な

頽
齡
に
ま
だ
間
の
あ
り
て
尾
根
桜

老
鶯
の
声
を
景
と
す
霧
山
路

脈
絡
の
な
き
浅
き
夢
明
易
し

梅雨籠り法会の塔婆書き溜める

熊よけの音を立てよと山毛櫟若葉

鳥の巢に声あり山毛櫨の幹の穴

目に力こめて毛虫を焼いてをり

施 餓 鬼 棚 角 な き 鬼 の ひ し め き て

仮 の 世 の な つ か し か ら む 魂 迎 へ

胸高に夜風過ぎゆく青蓮

朝涼や勤行の座に唱和の子

浄衣の児抱きてうたる滝行者

蓮の花池の汚れは視野の外

忘却は人の世の常萩を刈る

狐火や占ひごとこの廃れざる

笹鳴きに耳聴く居る尾根の径

枝わけて青空に伸ぶ柚子梯子

平成
十年



二〇
句

山頂の淑気に齡忘じをり

旅なれや炬燵嫌ひの春炬燵

持て余すパンダ風船春の風

ぼろぼろと乳歯の抜けて進級す

本山を花見の客として訪へり

駘蕩の歩幅もつるる花の杜

桜 藥 ぶ る や 素 顔 に 戻 る 杜

濃 き 味 の 古 茶 を た し な み ル ビ ー 婚

老愁は旅愁に似たり草の絮

半夏咲きとろりと匂ふ鯉の池

身軽さの欲しや自在につばくらめ

恙なく青嶺越えたる自負のあり

いつしかに世情に疎し葛の花

湯の玻璃に大き蛾の影峽更くる

紅蓮散りて童画の舟となる

初鴨のよそよそしくも池の芯

喪
ご
こ
ろ
の
つ
の
れ
る
夜
長
不
整
脈

湯
も
み
唄
洩
れ
く
る
湯
畑
秋
し
ぐ
れ

外套を着しは昔の一の酉

しかと守る老の分限冬林檎

平成十一年



二八句

ひ
た
す
ら
に
生
涯
現
役
大
旦

隆
隆
と
巨
樟
の
影
初
明
り

堂塔の焙り出されしお山焼

寒旱木魚は固き音を吐く

梅干を載す梅蕎麦の梅見茶屋

谷中より上野へ抜ける花吹雪

掃除機を畳目沿ひに走り梅雨

不忍の新生告ぐる蓮浮葉

熊除けの鈴を頼りて雪解沢

山景を深み研すほととぎす

短か夜は泣き足らぬかな夜泣き石

衰ふる五感しみじみ夕端居

たまきはるいのち嬉しく青嶺越ゆ

うづまける過去のくさぐさ蚊遣香

荒
滝のし
ぶきか
ぶりて
旅終る

水
馬げに
忙しげ
に樂し
げに

爽やかや焼岳の肌旭に映ゆる

砲音にまがふ遠雷下山急く

洋服は茶系を好む吾亦紅

鴨渡る江戸の鬼門の池を恋ひ

江戸言葉つと出て酒舗の夜長し

峠茶屋汗の補給のなめこ汁

連れあらば語らふものを山紅葉

登り来て耳の冷えゆく枯木山

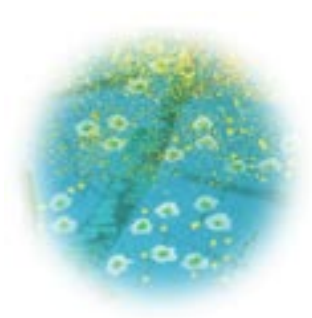
山の餉の冷ゆる指先卵剥く

落葉吹きあぐる地下鉄排気孔

年用意墓地の掃除を為すことも

数へ日の起居老懶ゆるさざる

平成十二年



三八句

家系では最長寿なり初勤行

気を張りて余生大事に大旦

声を張る誦経白息ゆたけしや

暖房も控えめにして老の一徹

散歩 圈 枯木 枯蓮 ホー ム レ ス

狐火 や 死語 となり たる 狐 憑 き

歌留多取り孫と接点一つ殖ゆ

熱き湯にそろりと浸かる寒の入り

山
旅
の
冷
え
持
ち
帰
り
大
嚏

大
柄
の
妓
に
追
ひ
抜
か
れ
花
の
路
地

風
つ
の
り
す
だ
ま
の
遊
ぶ
夜
の
桜

風
神
に
翻
ら
れ
て
を
り
夜
の
桜

遠富士に華やぎを添へ尾根桜

薫風を吸へよ末期の弟よ

硫
気
音
迫
る
山
窪
岩
鏡

行
々
子
魚
類
調
査
の
投
網
舟

盆の月欠けたりうからまた欠けて

トラツクは幌はためかせ青野翔ぶ

東京に山の碧空台風過

避暑の眼のいきいき寄木細工撰る

凡夫婦言葉乏しき避暑の旅

滝壺に足を浸して夏惜しむ

昼寝覚めまたも濁世に戻り来し

庫裡の戸の重く軋みて秋暑し

爽やかに山頂に立つ達成感

銀杏黄落いま晩年の砂時計

もどかしきスイッチバック秋の暮

感情の襞の起伏や柿紅葉

鈴
鳴
ら
す
熊
笹
の
徑
木
の
実
降
る

笹
山
路
露
ま
み
れ
な
る
登
山
靴

独
行
の
秋
の
山
路
の
流
離
め
く

山
の
餉
に
靴
を
脱
ぎ
捨
て
冬
う
ら
ら

閑伽井屋に噴く霊水も冬の音

せはしなき余生も年も詰りけり

数へ日や富士に真向ふ峠口

二十世紀納めの登山富士讃ふ

登り来て金時娘と年惜しむ

充実の晩年眩し冬紅葉

平成十三年



三二句

後半生運勢強き喜寿の春

戦経し躬のしみじみと喜寿の春

冬籠口ボツト犬を調教す

雪しぐれ床屋を出でし丸刈に

凧の糸手繰り幼き日をたぐる

沈丁花多忙を老の生き甲斐に

梅だより閉ざせし心ほぐれくる

幕山の屏風立ちして梅祭

晩年にゆとりいささか落の臺

これよりは寿のつく齡春迎ふ

その先の見たくありしが春の夢

花房をいとしみ拾ふ八重桜

老
桜
の
大
き
吐
息
の
花
吹
雪

糸
桜
し
だ
る
る
奥
も
糸
桜

長き貨車のどかに影を率きつれて

熊除けの鈴やラジオや春山路

三社祭雷神もまた渡御したり

老夫婦平安の日の大藤棚

遠雷をラジオで捉へ下山急く

昏き庫裡より炎昼の庭眩し

施餓鬼会にまねかざりしがはたた神

煎餅を黙々と焼く日の盛り

孫(祥雄・惇雄)の得度式の戒師を勤む 二句

すゞやかな墨染法衣得度式

すずやかに修法す法悦の阿闍梨

浅
間
嶺
に
真
向
く
巖
頭
秋
燕

晚
夏
光
な
に
に
急
く
と
も
な
き
焦
り

かいつぶり老の孤愁に似てもぐる

枯るるとも心に秘むる老の艶

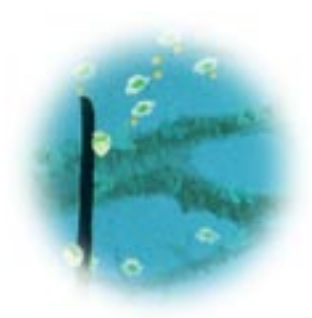
木の葉散る影を障子にとろろ蕎麦

ゆるやかな渡船の揺れも小六月

海坂へとろりと溶けし冬落暉

重ね着を作務衣に包み庫裡に坐す

平成十四年



二八句

白檀の数珠掌にかをる初勤行

去年今年淡き心の濃くなりぬ

陣馬より尾根を高尾へ初詣

唱題をかき消し響む寒太鼓

岩窟に居並ぶ羅漢日向ぼこ

店仕舞早き仲見世余寒の灯

啓蟄の地を叩きつぐホッピンググ

春炬燵電動ゲーム飽きもせで

半世紀過ぎし母の忌白牡丹

踊り子の大きまばたき黒牡丹

木下闇頭上を鴉かすめ過ぐ

監獄を觀し眼安らげリラの花

黒^ち
鯛^ぬ
釣
り
し
糸
鳴
り
今
も
耳
元
に

悠
然
と
孤
高
の
王
者
鬼
や
ん
ま

噴水をかなたに置きて木下闇

大僧正の辞令を拝受

法悦や四恩奉謝の躬の涼し

今生や喜寿を越したり敗戦忌

山旅の汗の量ほどビールかな

重陽や七を重ねし誕生日

敬老の日はステーキを所望せり

渡り来し鴨せつせつと身繕ふ

秋冥き奥壁攀づる影仰ぐ

淡くなる遠き日の飢ふかし甘藷

頼らるることは生甲斐石路の花

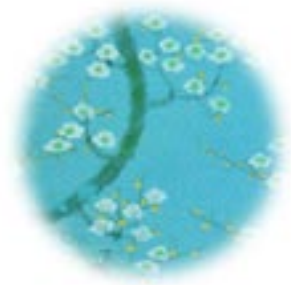
旅なれば神も氣息の安らぐか

身をすくめ無聊に堪ゆる冬の鷺

潮騒を子守歌とし山眠る

悲喜のうち喜の強かりし年惜しむ

平成十五年



十六句

元日の日めぐりめくる夕ごろ

白銀の富士研ぎ澄ます大寒波

寒
柝
の
路
地
曲
り
し
か
音
消
ゆ
る

春
愁
や
励
ま
す
言
葉
探
し
を
り

晩年の吾が影を率て枯野道

鴨帰り池の主演はスワンボート

耳の日や聞き返すこと多くなる

騒がしき世情を超えて寝釈迦かな

もの芽や心の
枷のほぐるかに

金婚のいまか
がやかに紅し
だれ

風雪に耐えし樹相の尾根桜

手入れよき皇居外苑みどりの日

熊野路や瀬音雨音河鹿笛

雨の紗を透かして仰ぐ神の滝

白
浜
の
白
砂
明
り
明
易
し

松
蟬
の
絶
唱
と
ぎ
れ
ざ
る
山
路





句集

月の雫

橘
沙希

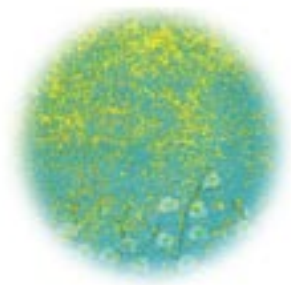
月の雫

平成八年
平成九年
平成十〇年
平成十一年
平成十二年
平成十三年
平成十四年
平成十五年

1 23 31 47 63 77 91 107

橘
沙
希

平成
八年



二
四
句

閑
伽
桶
の
柄
杓
動
か
ず
厚
氷

早
口
の
孫
の
饒
舌
冬
木
の
芽

断言を控えて冬の海を見る

古い母の手を撫でて居り梅の昼

陽炎に見失うふまいと母を喚ぶ

春光のプリズムの中子の駈ける

襖絵の小舟こぎ出す春の夜

蜘蛛の囿の光る妖しさこぬか雨

永き日の子と駈け廻る紐電車

今様の育児に要らぬ天瓜粉

くらがりの紫陽花の瞳が気にかかる

風鈴の音ほどに風の見えなくて

白檀の形見の扇子旅に持つ

若きらの四肢美しや敗戦忌

白萩は月の雫をもらひけり

秋の薔薇触れてはならぬこともある

群青の空ひたぶるに豊の秋

黄落や野心妬心の薄れをり

鎖場や峽を閉して霧流れ

錦秋や山姥に昼明るすぎ

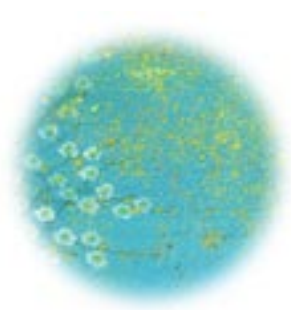
滝径に野菊ひと叢薄日さす

レシートの裏にメモする年用意

極月の余白をうめる柳生道

寒気団ミルクの膜の厚くなる

平成
九年



二
五
旬

大いなる流れに添ひて去年今年

初芝居ためらひがちに咳こぼす

背後より視らるる気配寒の月

渾身の華やぎみせて寒牡丹

春一番顔を小さく橋わたる

晩年の妣の墨絵に雛あられ

吊革の手に齡見え花の冷え

亀鳴くや音をよく出す子の玩具

大牡丹崩るる燭のゆらぐごと

半眼の如来に溢れ新樹光

ぜんまいの疑問符ならぶピカソ展

海行かば歌ひしむかし雲灼ける

青
蜥
蜴
風
も
う
ご
か
ぬ
石
の
上

結
論
は
一
日
の
ば
し
水
引
草

法師蟬爪の半月見つめ居り

山祇の気嫌直らず霧しまく

マスゲーム落葉の輪舞まぎれこむ

霧走り樹相の変わる山の径

ど
こ
か
し
ら
不
安
な
瞳
菊
人
形

夜
長
し
吐
息
吹
込
む
紙
風
船

石庭の砂紋うすれし雪しぐれ

足裏に触るる木の実や行者道

冬紅葉尼僧の過去は聞かざりき

鐘を打つ渾身の反り除夜の僧

いのち濃く余生過ごさむ除夜の鐘

平成
十年



二
五
旬

風花やふと妣の声妣の影

冬眠は至福の時間蛇蛙

愛憎ははるけくなりぬ寒昂

思ひ出の雲ゆらゆらと花菜道

春障子宿の柱に火伏神

夕月夜花おだまきは夢のいろ

老桜を天蓋として六地藏

ゆふづつや青蔦からむ遊女塚

洗ひ髪夜やはらかに深みゆく

遠郭公吉ともいはる北枕

バイクより若き盆僧会釈する

母のため低く作れり茄子の馬

月光に我が身も透きて露天風呂

病む母をさする思ひに墓洗ふ

枯れきれぬ身をいとほしむこぼれ萩

秋天を引き入れて澄むお釜の藍

老後とはすべて過去形秋の蟬

さめた眼の齢となりぬ乱れ菊

ざっくりと白菜を割り母は亡し

逃げやすき日射しを集め返り花

花芒明日を見たくて背のびする

霧峠石佛群るる異空間

きりもなき落葉追憶掃きためる

溪流の砕けて冷ゆる甲斐の月

枯菊を焚いてひとりの自由席

平成十一年



二八句

つ
く
づ
く
と
加
齢
の
重
み
初
鏡

口
中
に
飴
玉
雪
の
奥
比
叡

堂
塔
を
鎮
め
雪
舞
ふ
奥
比
叡

鼓
の
音
き
り
り
と
弾
み
寒
に
入
る

太陽も道草を
する花菜道

追憶のシャル
ルウイダンス
花明り

甘えたき日もあり
妣のよもぎ餅

花の雨降り止まず
心休まらず

手
相
見
の
淡
き
灯
花
の
路
地

馥
郁
と
身
の
解
か
れ
ゆ
く
夕
牡
丹

仏足に雨水をとどめ濃山吹

おぼろ夜の月のいたずら人違ひ

蝶
生
る
庭
の
死
角
の
み
か
ん
の
樹

梅
雨
深
し
軋
む
寺
門
に
弾
丸
の
痕

老犬は犬を忘れて
苺食む

梅雨に病みのぞ
けばくらき万華鏡

黄泉といふ未来もありて夏鶯

炎天の萎縮してゐる影法師

迷路には出口あるはず青蜥蜴

向日葵に無為のひと日をのぞかれる

水馬靄の湖面に輪をふやす

追伸の文字の乱れや法師蟬

花野行く夢のつづきの記憶あり

捨てきれぬ古きもろもろ破れ蓮

聞き流す術も覚えて返り花

コスモスの海に分け入り侏儒となる

飛鳥野をしぐれの雲と歩きけり

冬山路五体のどこかきしみをり

平成十二年



二四句

まだまだと思ひし齡寒三日月

侘助のこぼれて動く猫の耳

あるがままいきる他なく梅香る

一山の木霊鎮めて梅香る

白粥に地玉子一つ春の風邪

それぞれへやさしき言葉雛納め

春 彼 岸 土 黒 々 と 発 酵 す

手 を つ な ぐ 園 児 に ゆ ず る 花 の 径

ひとときの癒しの香り
夕牡丹

日矢一条さしこむ溪をつばくらめ

他愛なきことにこだわりかやつり草

煮つめつつ私の時間梅のジャム

は
た
目
に
は
誰
も
倅
せ
梅
雨
深
し

梅
雨
た
の
し
傘
が
歩
く
よ
一
年
生

「海ゆかば」忘ることなき青き夏

微笑みも言葉のひとつ花芙蓉

柳 蘭 吐 息 は 桃 色 雲 と なる

聞 か れ れ ば 倅 せ と 言 ふ 敬 老 日

風の自己嫌悪してゐる秋暑し

豊満な栗ご飯炊く風の夜

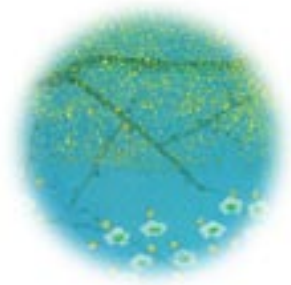
鰯雲つつがなくての筆不精

わけもなく淋しきひと日神の留守

胸騒ぎしづめる冬の水を飲む

気がかりな向こうの岸の木守柿

平成十三年



二四句

大阿闍梨いきいきと老い初勤行

往診を待つ流感の身づくろひ

箒
目
に
音
譜
の
ご
と
き
落
椿

蓄
へ
の
彩
使
ひ
き
り
冬
蓄
薇

植木鉢
ドミノ
倒し
に
春疾風

芽吹く
匂ひ
少女の
頃の
青写真

カレーの日ナンを買ひ足す春の街

記憶みな父とつながる春の土手

白牡丹雲の白さを恐れけり

陽炎の中より出でし人力車

悲しみの足音よぎる座禪草

濡れ髪のたしかな重さ青葡萄

陽炎を裏返しては耕運機

老境に入りきれざる未草

饒舌にいささかの悔ねむの花

一山が真空となる蟬時雨

向日葵の花首疲れ陽が沈む

逢魔ヶ時狐とならむ芒原

出
格
子
の
影
は
斜
め
に
菊
日
和

湯
上
り
の
ほ
の
か
な
香
り
秋
裕

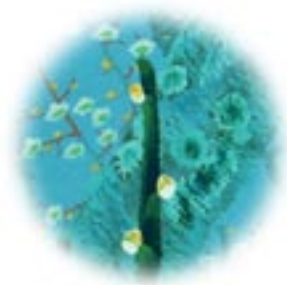
錦秋のアルペンルート鳶の笛

そぞろ寒肩を寄せ合ひ道祖神

捨てるもの捨てかねてゐる十二月

気ばかりが先走りして年の暮

平成十四年



二六句

雪吊りのハープ爪弾く雪女

狛犬のうつろの阿吽冬ざるる

したたかに生ききし齡野梅咲く

春光に影の重なる稚魚の群

一筋の滝のひびきや涅槃西風

脳腫瘍刻ゆるやかに花吹雪

黄砂降り三十六峰かき消せり

ひとときは童心となる菖蒲笛

空の
旅梅雨の
財布に
守り札

老鶯や
知床湖畔
鹿と合ふ

新緑の風のなだめし湖静か

浄土よりメール下さい 孟蘭盆会

山清水含みて登山冥利かな

自分史もぶ厚くなりて夏芝居

手
さ
ぐ
り
の
人
生
長
し
夜
の
雷

風
鈴
の
風
が
広
げ
る
夜
の
と
ば
り

涼風や緋色法衣の躰取る

草いきれ疎開在所の匂ひかな

凶鑑手にしんがりを行く花野かな

閻王の彫りの翳りや十三夜

菊人形菊の命をもらひけり

片耳が途方にくれてゐる夜長

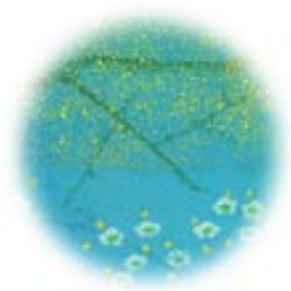
病む友に言葉をさがす暮の秋

ふつきれぬ思ひさらって初木枯

掛軸のゆがみを直す大晦日

逢ふ魔が刻歩幅ちぢめて落葉踏む

平成十五年



一〇句

息白く墨痕淋漓「帰」と大書

寒行僧遠ざかり闇もどりけり

爪木崎霧笛遠くに野水仙

一言を言ひそびれたる朧の夜

探梅や壊れさうなる昼の月

ウインドーの写楽の寄り目花粉症

折鶴の和紙の手ざわり
春炬燵

喜寿の春ループの中の
運命線

春愁や虚空をつかむ仁王像

夜半の雨静かに松の芯伸びる

あとがき

ともどもに古稀より喜寿、そして金婚を迎えた八年間の句より、

澄男第五句集 山景

沙希第三句集 月の雫

の合同句集をまとめました。これも健康であったことと喜んで居ります。

平成十五年六月をもって、四半世紀つづいた長久院での句会を閉じ、今後は折にふれて、気儘に俳句を楽しんで参りたいと思つて居ります。

平成十六年四月

橘 澄男

橘 沙希

著者略歴

山 景

橘 澄男

大正 14 年 9 月 9 日生

句集

催花雨・菊酒・無垢童子・転生

月の雫

橘 沙希

大正 15 年 3 月 29 日生

句集

花浄土・軽鼻の子

住所 ☎ 110-0001

東京都台東区谷中 6-2-16 長久院

☎ 03-3821-0977



発行

平成十六年四月三十日

著者

橘 澄男
橘 沙希

発行所

一六四・〇〇一一 東京都中野区中央二・五〇・三

☎〇三・三三七一・四六二三

装丁
印刷

〒一一三・〇〇三三 東京都文京区本郷五・二三・十三

☎〇三・三三二二・八五五八

佐藤喜孝
(株)栄光

表紙 「早春」六曲半双屏風絵

橘 天敬